

千葉市六通貝塚出土の縄文時代後期土器群Ⅱ

古谷 渉

1 はじめに

昨年、『貝塚博物館紀要』第32号において千葉市六通貝塚における採集資料の一部を紹介させていただいた。これは、その続編である。

六通貝塚はかつての「千葉東南部ニュータウン」、現在の「おゆみ野」の一角に位置しており、村田川下流北岸、通称イズミ谷津の最奥部、標高約45mを測る台地上に位置する。都川支流の通称仁戸名支谷と村田川水系の分水界が近くに存在する。この付近には木戸作貝塚、小金沢貝塚、森台貝塚、上赤塚貝塚、大膳野南貝塚といった後期の貝塚集落が集中している。貝層の規模は東西140m、南北125mの馬蹄形（弧状）を呈しており、集落の時期は縄文時代中期末～晩期中葉までである。

六通貝塚の過去の調査は、1949年に東京大学人類学教室により発掘調査が行われ、1954年には道路工事の際に人骨が発見されている。近年では、(財)千葉県文化財センターによる発掘調査が1991～1998年にかけて断続的に行われ、2002～2003年には(財)千葉市教育振興財団 埋蔵文化財調査センターによる発掘調査が行われている。

1991～1998年にかけての調査では、縄文時代中期末の加曽利EⅣ式期～晩期前半に及ぶ遺構が検出された。約40軒の竪穴住居跡・多数の土坑・溝が検出され、現在、報告書刊行に向けて整理作業中である。また、後期前葉～晩期前半の貝層が調査され、出土した貝類はイボキサゴを主体とするもののハマグリ・シオフキも一定量を占めている。出土土器は加曽利EⅢ式～前浦式土器まで出土しているものの、加曽利B3式～安行3a式土器が主体を占める。また、後期後葉～晩期前半の貝層部分からシカ・イノシシの大型の骨片が集中的に出土している。

2002～2003年の調査では、縄文時代中期～晩期の竪穴住居跡15軒、土坑20基、屋外炉5基、埋甕3基、人骨7体の他、晩期中葉の獣骨層の広がりが見えられた。遺物は縄文土器（中期・後期・晩期）、石器、土製品、石製品、多量の獣骨が出土した。調査区は馬蹄形貝塚の内側緩斜面にあたり、中央窪地には獣骨層が、その外側にはほぼ全面に貝層が広がっている。貝層はイボキサゴ・ハマグリを主体としており、後期前葉～後期後葉にかけて形成されたものと考えられる。また、貝層下からは後期前葉（堀之内1式期）を主体とする竪穴住居跡群が検出された。晩期中葉の獣骨層は馬蹄形貝塚の中央窪地部分に広がりを見せている。獣骨はほとんどが生骨であるが、一部焼骨も含んでおり、シカ・イノシシを主体とするものの、クロダイなどの魚骨も含まれる。また、土器を主体とした多くの人工遺物も含む点が特徴的である。獣骨層下から検出された伸展葬の人骨は、中央窪地の縁辺部に沿って縄文時代後期の墓域を形成してい

ると考えられる。一方、貝層下から出土した屈葬の人骨は中期末～後期初頭まで時期が遡る可能性が高い。

今回、紹介させていただく採集資料はおそらく縄文時代後期中葉の貝層部分から出土したものと考えられる。しかし、出土地点は特定されておらず、今後の検討を要する。

2 土器の事実報告

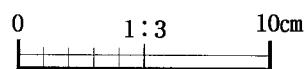
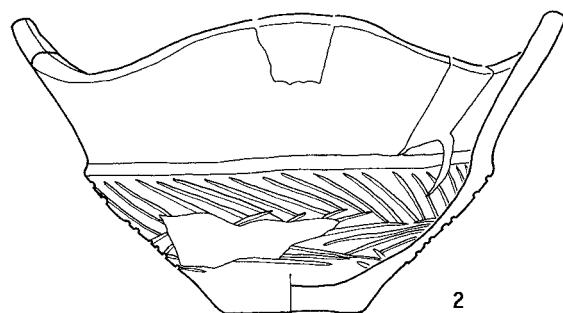
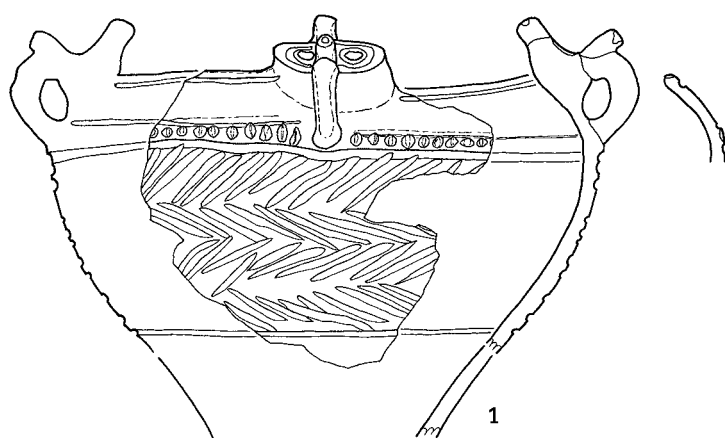
前回に引き続き、加曽利B1～B2式に焦点を当てて資料化した。縮尺は復元個体が1/3、破片資料が1/2である。

第1図-1は加曽利B2式の鉢である。口径18.0cm、残存高16.5cm、胴部最大径22.0cmを測る。胴部が張り出し、口縁部がすばまる壺形の器形をしている。4つの口縁部破片にはそれぞれメガネ状の突起が残存しており、おそらく4単位であると考えられる。メガネ状突起には橋状把手1基と棒状突起2基が張り付いている。口縁部に沈線が1条めぐり、胴部上半に刻目列を有する。刻目列の上端の沈線ははっきりしない。胴部の沈線区画内には4段の太い斜沈線を上→下の順で交互に施文した、矢羽状沈線が施されている。沈線区画→刻目列→矢羽状沈線の順で施されているが、上の区画沈線は矢羽状沈線施文後にナゾリを入れている。外面調整は突起部がタテナデ→タテミガキ、口唇部及び口縁部がヨコナデ→ヨコミガキである。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキである。

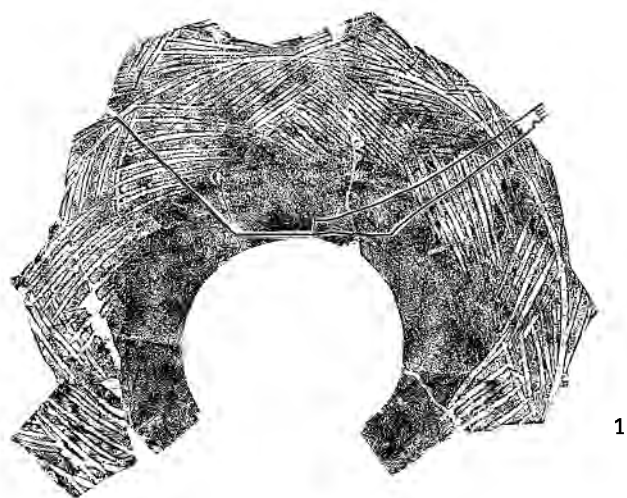
第1図-2は加曽利B2式の鉢である。口径21.8cm、底径5.4cm、器高11.8cm、胴部最大径16.2cmを測る。4単位の小波状口縁を持ち、胴部には3段の斜沈線を上→下の順で交互に施文した、矢羽状沈線が施されている。外面調整は口縁部と底辺部がヨコナデ→ヨコミガキ、底部はナデである。内面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴部がタテナデ→タテミガキ及びヨコナデ→ヨコミガキ、底部が回転ナデ→回転ミガキである。外面に白色付着物があり、貝層中出土と考えられる。

第2図-1は加曽利B2式の鉢である。底径6.2cm、残存高6.5cm、残存する胴部最大径17.3cmを測る。胴部には横位の区画沈線が1条めぐり、上下に斜沈線が沈線区画→斜沈線の順で施されている。斜沈線は彫りが深くシャープな沈線が上→下、左→右の順でパッチワーク状（註1）に施されている。外面調整は底部がナデである。内面調整は胴部がヨコナデ→ヨコミガキ、底部はタテナデである。黒斑は底部付近に広がっている。

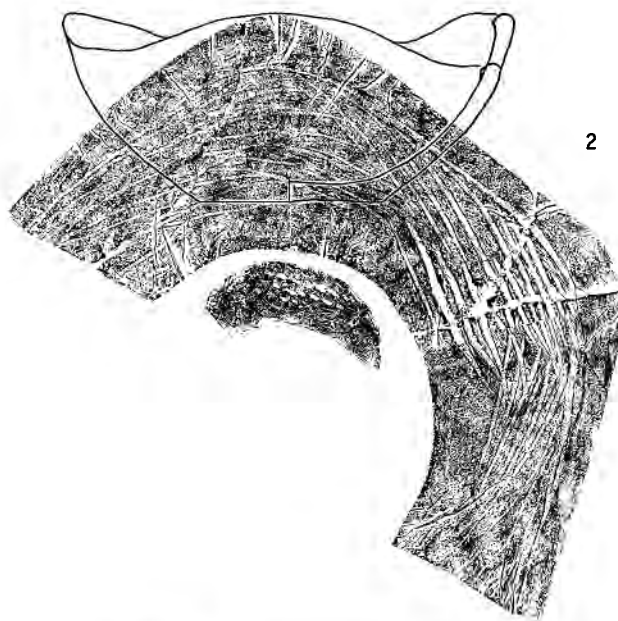
第2図-2は加曽利B2式の浅鉢である。口径17.8cm、底径7.1cm、器高7.5cmを測る。3単位の小波状口縁を持ち、胴部には斜沈線が斜沈線→沈線区画→磨り消しの順で施されている。口縁無文部と斜沈線施文部との間は沈線区画で区切られているが、区画がはっきりとしない。外面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、底辺部はヨコナデである。底部の網代痕は一部がナデで磨り消されている。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキ、底部は交差ナデ



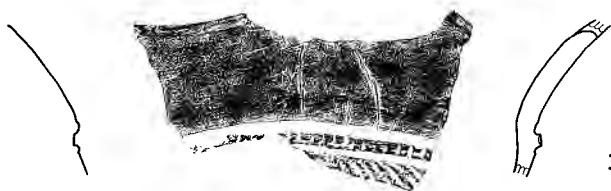
第1図 六通貝塚出土土器①



1



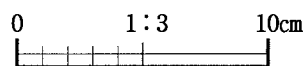
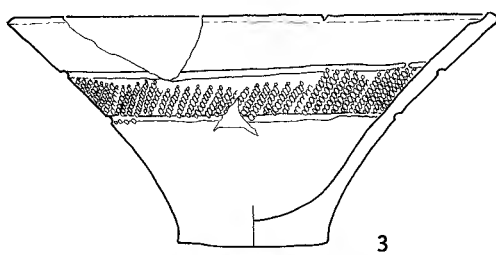
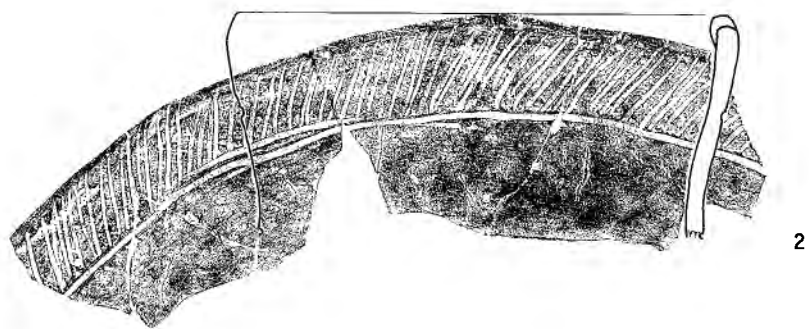
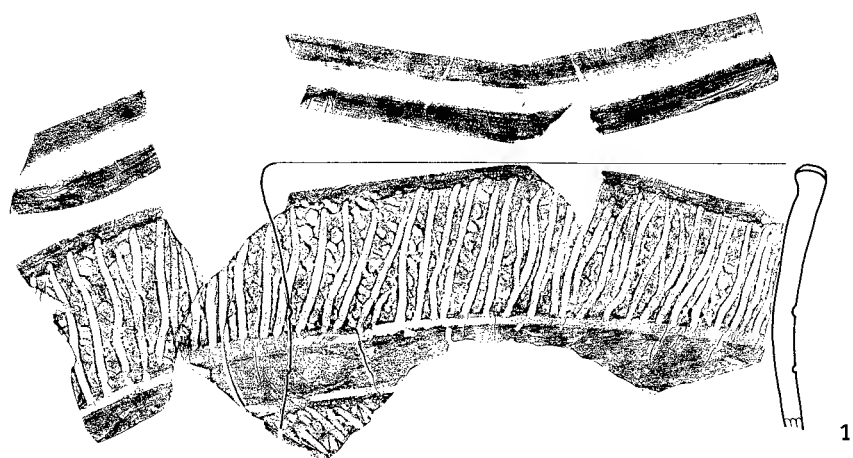
2



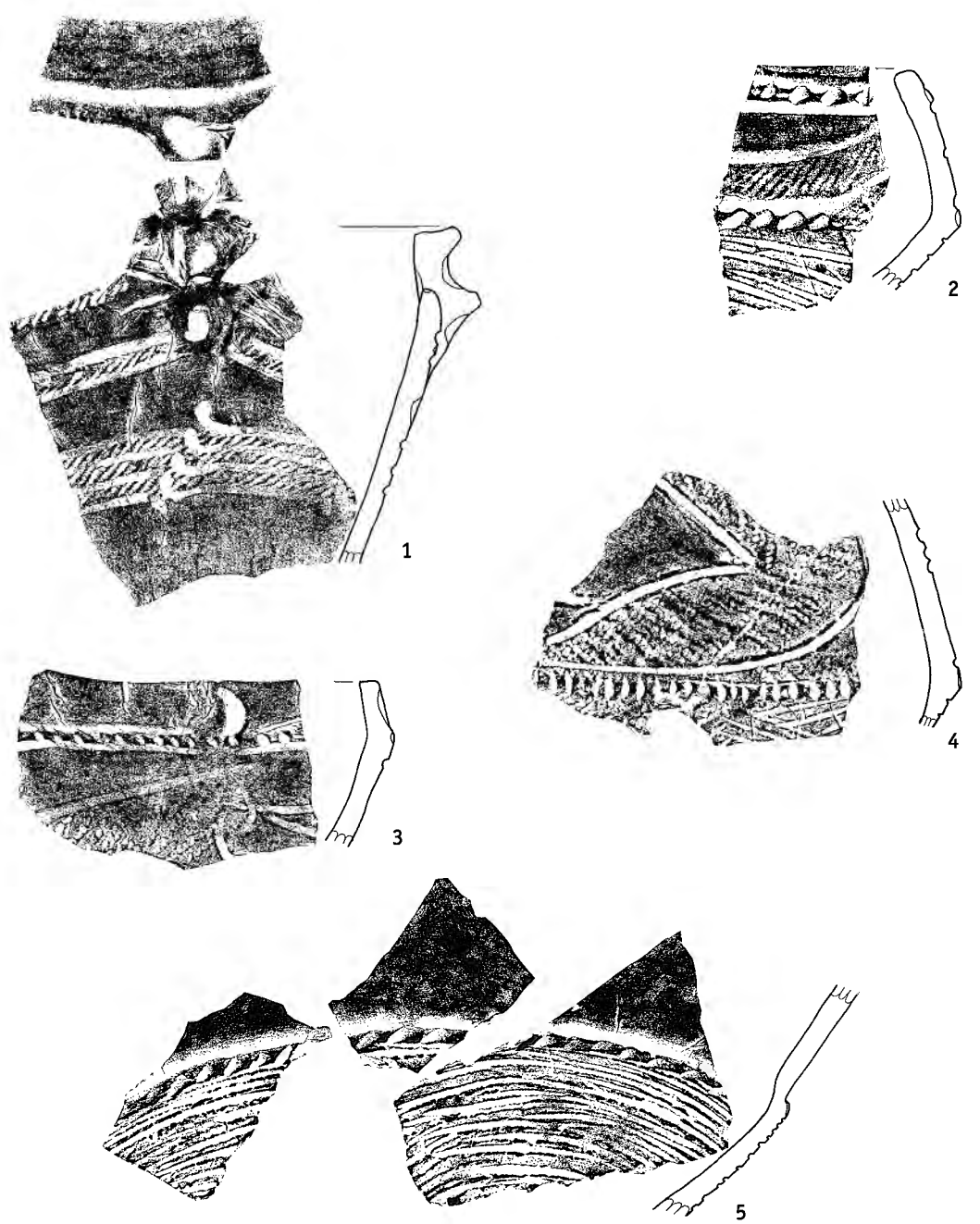
3

0 1:3 10cm

第2図 六通貝塚出土土器②



第3図 六通貝塚出土土器③



0 1:2 10cm

第4図 六通貝塚出土土器④

→交差ミガキである。

第2図-3は加曾利B2式の鉢である。口径23.8cm、残存高6.1cm、頸部径18.0cmを測る。波状口縁を持ち、口縁部の無文部は成形時に削り出されている。頸部には刻目列を有する。胴部には磨消縄文が施されており、RL縄文→沈線区画→刻目列→ミガキの順で施されている。外面調整は無文部がヨコナデ→ヨコミガキで、よく磨かれている。内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。無文部に成形時の段差が存在することから、第4図-5との類似性が考えられる。

第3図-1は加曾利B2式の深鉢である。口径22.4cm、残存高10.4cm、頸部径20.0cmを測る。小波状口縁を持ち、器形は緩やかに外反する。口縁部には内面沈線が1条めぐる。頸部の無文帯を挟んで口縁部と胴部には粗いRL縄文と太い斜沈線が施され、粗縄文RL→斜沈線→沈線区画→磨り消し・ミガキの順で施されている。外面調整は無文帯がヨコナデ→ヨコミガキである。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキである。

第3図-2は加曾利B2式の深鉢である。口径20.2cm、残存高8.8cm、頸部径17.4cmを測る。小波状口縁を持ち、器形は緩やかに外反する。小波状口縁は2カ所しか残存しないが、それらの間隔からおそらく5単位と考えられる。頸部無文帯の上、口縁部には斜沈線が施され、斜沈線→沈線区画→磨り消し・ミガキの順で施されている。外面調整は無文帯がヨコナデ→ヨコミガキである。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキである。

第3図-3は加曾利B2式の鉢である。口径19.4cm、底径6.0cm、器高9.1cmを測る。口縁部には内面沈線が1条めぐる。胴部には横位の沈線区画内に充填縄文が施され、沈線区画→LR縄文→ミガキの順で施されている。外面調整は口縁部～胴上半部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴下半部がナナメナデ→ナナメミガキ、底辺部がヨコナデ→ヨコミガキである。内面調整は口縁部～胴部がヨコナデ→ヨコミガキ、底部は回転ナデ→回転ミガキである。底部の網代痕は一部がナデで磨り消されている。黒斑は正面右側に内外面1カ所ずつと左側外面1カ所の180°対称位置に3ヶ所ある。

第4図-1は加曾利B1式の深鉢の口縁部～胴部破片である。波状口縁波頂部に円形の窪みを有する突起を持ち、内面に段を有する。波頂部以外の口唇上と口縁部に刻目列が施されている。胴部には磨消縄文の横帯文と区切り文が施され、LR縄文→沈線区画→磨り消しの順で施されている。外面調整は口縁部と胴部がヨコナデ→ヨコミガキである。内面調整は口縁部がヨコナデ→ヨコミガキ、胴部がタテナデ→タテミガキである。

第4図-2は加曾利B2式の浅鉢の口縁部破片である。緩やかな波状口縁を有する。2段の刻目列を有し、沈線区画→刻目列の順で施されている。刻目列の間には磨消縄文が施され、LR縄文→沈線区画→磨り消し・ミガキの順で施されている。さらにその下には鋭い斜沈線が施されている。内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。

第4図-3は加曽利B2式の深鉢の口縁部破片である。文様要素からおそらく3単位把手を持つ波状口縁深鉢の一部と考えられる。内面の段差ははっきりしない。三日月状の沈線の下に刻目列を有し、沈線区画→刻目列の順で施されている。その下には充填縄文による括弧文が施され、沈線区画→括弧文→LR縄文→磨り消し・ミガキの順で施されている。内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。

第4図-4は加曽利B2式の鉢の胴部破片である。刻目列を有し、沈線区画→刻目列の順で施されている。その上に磨消縄文が施され、RL縄文→沈線区画→磨り消しの順で施されている。刻目列の下には斜沈線が施されている。内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。黒斑は斜沈線施文部に1ヶ所ある。

第4図-5は加曽利B2式の浅鉢の胴部破片である。刻目列上側の無文部は成形時に削り出されており、刻目列が浮き上がった形になる。刻目列の下には条線が条線→刻目列の順で施されている。外面調整は無文部がヨコナデ→ヨコミガキでよく磨かれている。内面調整はヨコナデ→ヨコミガキである。無文部に成形時の段差が存在することから、斜沈線や条線が施される斜線文土器の中でも比較的古い様相を示すものと考えられる。

3 まとめと今後の展望

今回、紹介した資料は加曽利B2式土器の中でも斜沈線や条線が施される斜線文の土器（第1図-1・2、第2図-1・2、第3図-1・2、第4図-2・4・5など）がまとまっている。しかし、一口に斜線文の土器といっても、太い斜沈線のもの（第1図-1）や、パッチワーク状の斜沈線のもの（第2図-1）、頸部に無文帯を持つもの（第3図-1・2）、上部に磨消縄文などの文様帯が存在するもの（第4図-2・4）、上部の無文部に成形時の段差が存在するもの（第4図-5）など、様相が異なる土器群が数多く存在する。六通貝塚出土の資料は時間幅が少ない割には器種や個体のバリエーションが多く、東京湾東岸地域における加曽利B2式土器の成立と展開過程を解明していく上で、良好な資料となっている。まだ紹介していない資料も含めて、今後も六通貝塚出土土器群の位置付けを行っていく必要がある。

謝辞

今回、資料紹介の機会を与えていただくとともに、ご協力を賜った千葉市立加曽利貝塚博物館並びに関係機関に感謝の意を表したい。また、小論を執筆するにあたり、様々な助言を与えてくださった方々にここに記して謝意を表したい。

秋田かな子、阿部芳郎、猪瀬美奈子、江原 英、君嶋論樹、須賀博子、菅谷通保、宮内慶介、吉岡卓真（五十音順・敬称略）。

註1：菅谷通保氏が「一定幅の施紋範囲を設定しその内部に斜線を充填するという描き方をとっている。パッチワーク状とでも言うべきこの独特の描出技法を認識することが、斜線紋土器群の成立とその後の変化を考える鍵となる。」と述べている（「南関東東部後期中葉土器群の様相」『第9回縄文セミナー後期中葉の諸様相－記録集－』1996 縄文セミナーの会）。

（財団法人千葉市教育振興財団埋蔵文化財調査センター）

<六通貝塚関連文献>

- 加部巖夫 1881 「古器物見聞之記及模図」『好古雑誌』6 好古社
高橋健自 1913 『考古学』聚精堂
武田宗久 1953 「原始社会」『千葉市誌』千葉市
伊藤和夫、金子浩昌 1959 『千葉県石器時代遺跡地名表』千葉県教育委員会
酒詰仲男 1959 『日本貝塚地名表』土曜会
杉原莊介 1968 『千葉市東南部丘陵地帯遺跡分布調査報告』千葉県考古学会
後藤和民 1970 「原始集落研究の方法論序説」『駿台史学』27 駿台史学会
堀越正行 1972 「縄文時代の集落と共同組織」『駿台史学』31 駿台史学会
千葉市史編纂委員会 1974 『千葉市史 第1巻』原始古代中世編 千葉市
千葉市史編纂委員会 1976 『千葉市史 史料編1』原始古代中世 千葉市
米田耕之助 1977 「千葉県六通貝塚出土の異形台付土器」『古代』62 早稲田大学考古学会
千葉県教育庁文化課 1981 『千葉県の貝塚』千葉県文化財保護協会
千葉県教育委員会 1983 『千葉県所在貝塚遺跡詳細分布調査報告書』千葉県教育委員会
千葉市教育委員会 1984 『千葉市埋蔵文化財分布地図〈改訂版〉』千葉市教育委員会
宮城孝之 1986 「六通貝塚貝層範囲確認調査」『研究連絡誌』18 （助）千葉県文化財センター
百瀬幸徳 1996 「千葉市六通貝塚」『平成7年度千葉県遺跡調査研究発表会発表要旨』千葉県文化財法人連絡協議会
（助）千葉県文化財センター 1999 『千葉県埋蔵文化財分布地図(3)－千葉市・市原市・長生地区（改訂版）－』千葉県教育委員会
西野雅人 2000 「六通貝塚」『千葉県の歴史 資料編 考古1（旧石器・縄文時代）』千葉県
田中英世 2003 「六通貝塚」『埋蔵文化財調査（市内遺跡）報告書－平成14年度－』千葉市教育委員会
古谷 渉 2004 「六通貝塚」『埋蔵文化財調査センター年報16－平成14年度－』（助）千葉市教育振興財団
中山貴正 2004 「六通貝塚（市内遺跡）」『埋蔵文化財調査センター年報16－平成14年度－』（助）千葉市教育振興財団
古谷 渉 2005 「千葉市六通貝塚出土の縄文時代後期土器群Ⅰ」『貝塚博物館紀要』32 千葉市立加曽利貝塚博物館

※他に多くの参考文献が存在するが紙数の関係で省略させて頂いた。